



ジオパーク通信

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会だより

第11号
洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会
(洞爺湖町役場ジオパーク推進課内)
☎ (0142) 74-3015

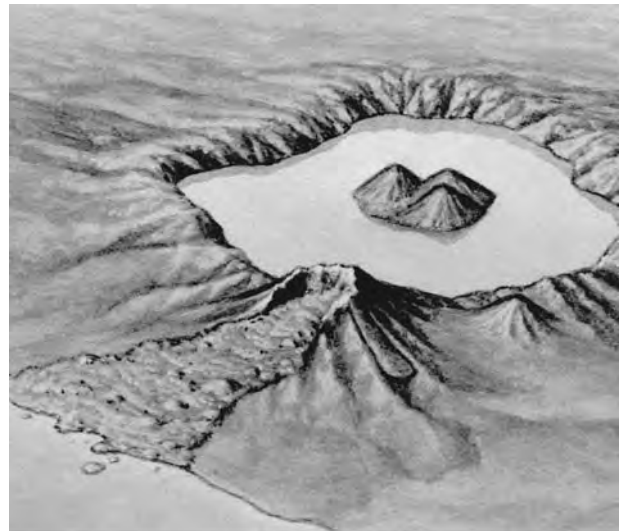
前回のジオパーク通信では、約11万年前の洞爺湖の成り立ちについてご紹介しましたが、今回は7,000～8,000年前頃の洞爺湖周辺地域についてご紹介します。

7,000～8,000年程前、それまで富士山のような形をしていたと思われる有珠山は、山頂から大きく崩れてしまいます。崩れた岩石は、噴火湾方面に流れました。このように山が崩れる現象を「山体崩壊（さんたいほうかい）」といいます。

現在、国道37号線沿いにある有珠善光寺の境内には、この時に有珠山からなだれて落ちてきた巨大な岩石が点々と残っています。

海に流れ込んだ岩石は、浅瀬や入り組んだ湾をつくりました。波の勢いが和らぐと、海草が良く育ち、多くの種類の魚も住むようになりました。栄養豊富な海にはイルカやクジラなどの海獣も回遊してくるようになりました。

有珠山は、山体崩壊をおこしてから、長い休眠期間に入りました。



噴火湾沿岸では、縄文時代の人々が、この穏やかな時期に海の恵みを受けて暮らしていました。

洞爺湖町の入江・高砂貝塚、伊達市の北黄金（きたこがね）貝塚からは、縄文時代の人々が作った精巧な道具類がたくさん発見され、当時の人々が知恵や工夫をこらしながら、この地域で生活していたことがわかっています。

「入江・高砂貝塚館」（洞爺湖町高砂町44）や「北黄金貝塚情報館センター」（伊達市北黄金町75）では、ていねいに作られた土器や道具類が展示されています。

また、入江貝塚公園や北黄金貝塚では、復元された住居や貝塚の様子を見ることもでき、縄文時代の豊かな精神世界を垣間見ることができる場所になっています。

休眠していた有珠山が再び噴火活動をはじめるのは1663年、江戸時代のこと。

次回は、江戸時代以降の噴火についてお伝えします。



現在も数m級の巨石が見られる善光寺境内



入江・高砂貝塚から発見された釣針・銚頭

噴火湾沿岸には、このほかにも「鷲ノ木遺跡」（森町）や「大船遺跡」（函館市）があり、青森県・岩手県・秋田県の縄文遺跡とともに、《北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群》として、世界遺産登録を目指しています。